

宏智禪師頌古百則の研究（四）

佐藤悦成編

緒言

本稿は、宏智頌古百則の研究（四）となる。既に（一）より（三）までの考察を終えて、今回は第八十一則より第百則までを収載した。

本論考では、先学の成果を参考にしつつ、独自の考察を進めてきた。従来は、坐禅体験に基づいた提唱の形態か、

学問的考察による和訳の形態でまとめられてきたが、本稿では釈意に重点を置き、宏智が伝えようとした思想に迫ろうと試みた。

今回の（四）に参加してくれたのは、佐藤清道氏、伊藤秀真氏、大橋崇弘氏、西川慈恩氏、杉原修一氏、富川拓哉氏を中心として、関美那子氏、有田大悟氏の参加も得た。参加諸氏の協力に感謝している。

第八十一則 玄沙到桌

【本則】 擧。玄沙到蒲田縣。百戲迎之。次日問小塘長老。昨日許多喧鬧。向什麼處去。小塘提起袈裟角。沙云。料掉沒交涉。

宏智禪師頌古百則の研究（四）（佐藤）

〔訓読〕 挙す。玄沙 蒲田県に至る。百戯して之を迎う。次日 小塘長老に問う。昨日 許多の喧鬧、甚麼の処に向かつて去るや。小塘 袈裟角を提起す。沙云、料掉没交渉と。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。玄沙師備が蒲田県に行く
と、歌や踊りなど様々な歓迎をうけました。翌日、
玄沙は小塘長老に「昨日は賑やかでしたが、今日
は、その賑やかな様子はどこにいったのでしょうか」と質問をしました。すると小塘は袈裟の角をつ
まみ上げる所作で応じました。それを見て玄沙は
「目の事実に分別を加える必要はありません。昨
日のことは昨日のことで、今日のことは今日のこ
とです」と言いました。

〔釈意〕

玄沙は、蒲田県で歓迎を受けたことを題材にして、小塘の境地を
点検している。昨日の喧鬧を煩惱にみたてて、得悟の後に煩惱は
何処に行つたのかを問ひ、小塘に悟道の在り方を質した。それを
受けて、小塘は袈裟の角をつまみ上げて、ことばでの応答を避
け、本来の自己に何も変わりが無いことを示した。小塘は、仏法
が日々日常にあることを示し、悟道の後もそれは変わらず、修行
が慈悲行に転じるだけだと示している。煩惱は除くもので、悟道
は理想であるという分別にないことを端的に示した。玄沙は小塘
の応答に対して、「料掉没交渉」と言つて「昨日のことを今日に
持ち込む必要はない」と示し、分別に滞らず、修行（昨日）が慈
悲行（今日）に転じるのみと示した小塘の境地を認めた。

〔頌〕 頌曰。夜壑藏舟。澄源著棹。龍魚未知水爲命。折筴不妨聊一攪。玄沙師。小塘老。函蓋箭鋒。探竿影草。潛

縮也老龜巢蓮。遊戯也華鱗弄藻。

〔訓読〕 頌に曰く。夜壑に舟を蔵し、澄源に棹を著く。龍魚は知らず 未だ水を命と為すを。折筴は妨げず 聊か一攪する

を。玄沙師。小塘老。函蓋箭鋒。探竿影草。潛縮や老亀蓮に巢い、遊戯や華鱗藻を弄す。

〔和訳〕

天童覚和尚が頷にいいました。夜の闇が舟の姿を隠しています。澄んだ水面に棹をさして船が進んでいきます。龍魚は水中でしか生きていけないことを知りません。折れた箸で水面をかき回せば、水の中にいることを少しは分かるでしょう。玄沙と小塘の境地は、箱の蓋と本体が合わさるるよう一致していません。また、射られた矢が寸分違わず正面からぶつかるように、玄沙師と小塘老の境地は同じです。一方が探竿を用いれば、一方は影草を用います。老いた亀が蓮に巢をつくって静寂を保ち、鯉が藻の隙間を自由に泳ぐようなものです。

〔釈意〕

夜中の暗さで舟の姿がみえないことは、平等の意を示し悟境を表している。棹を動かして舟を進めることは悟りの世界に安住しないことを示している。これは、龍魚は水の中を自由に泳ぎまわっているが、自身に水の中という意識はない。悟りに至った人は悟ったと分別に陥らないのである。玄沙はそれを試している。折れた箸でかき回すのはその譬えである。分別に陥らず、迷妄の無い境地という点では玄沙も小塘も同等である。例えば、老いた亀が蓮の根元で佇むかと思えば、鯉が藻の隙間を自由に泳ぐように、二人とも分別の跡形をのこさず、真に自在であることを示している。

〔語彙〕

【玄沙】玄沙師備（835〜908）のこと。閩県（福建省）の人。雪峰義存の法嗣。普応山に庵した後、玄沙院、安国院に住す。【小塘長老】不詳の人。玄沙の会下とも。【許多】たくさん。多くの。【喧鬧】やかましい様子。【料掉没交涉】関わりが無い。離れている。目算や計較では仏法を体得することはできないことをいう。【夜壑藏舟】身をかくして顕さないこと。【莊子】の引用。【折筴】折れた箸。【探竿影草】盜賊の用いる探り棒と蓑。【華鱗】鯉のこと。また、魚をほめた言葉。

第八十二則 雲門声色

【本則】 擧。雲門云。聞聲悟道。見色明心。觀世音菩薩。將錢買胡餅。放下手却是饅頭。

【訓読】 挙す。雲門云く。聞声悟道。見色明心。觀世音菩薩、錢を將つて胡餅を買う。手を放下すれば却つて是れ饅頭。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。雲門文偃がいました。香嚴智閑は、竹の音を聞いて悟りに至りました。靈雲志勤は、桃の花の色を見て悟りに至りました。觀世音菩薩がお金を持って胡餅を買いました。胡餅をもっている手の中をみたらそれは饅頭でした。

【釈意】

雲門が初めに、香嚴撃竹の話と靈雲桃華の話を示した。これは、声境を通じて悟りに至ることもあれば、色境を通じて悟りに至ることもあることを説いている。二人に共通しているのは、悟りへの執着を脱した久參修持の功であり、分別に縛られていない点である。觀世音菩薩であっても、お金を払って我が物としたという分別に滞れば、胡餅を買ったと思っていたものが饅頭であったという錯誤に陥る。心に捉われや分別がはたらいては、悟道は困難なことを表している。

【頌】 頌曰。出門躍馬掃攙槍。萬國煙塵自肅清。十二處亡閑影響。三千界放淨光明。

【訓読】 頌に曰く。門を出て馬を躍らして攙槍を掃う。万国の煙塵自ら肅清。十二処に閑影響なく、三千界に淨光明を放つ。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。將軍が馬を躍らして城門を出て、真つ直ぐ突き進んで国中の敵を一掃したので平和がおとずれました。目前の対象に心を奪われることがなければ、この三千大千世界は仏の世界そのものです。

〔釈意〕

雲門が説いたのは、心に湧き起こって止むことの無い分別を慧星に喩え、修行はそれを掃うことに譬えている。これは、修行の基本であり、油断すれば直ぐに迷妄に陥るといふ。対象を捉えて認識することに迷いが生じるのではなく、好悪などの分別が加わることで真実を会得できないのである。

〔語彙〕

〔雲門〕雲門文偃（864〜949）のこと。嘉興（浙江省）の人。一七歳の頃出家。睦州道蹤に参じた後、雪峰義存に参じて法を嗣ぐ。〔聞声悟道見色明心〕「聞声悟道」は、外界の声境を通じて自己の本心をあきらかにすること。香巖智閑（?〜898）の故事に由来する。「見色明心」は、ものを見て自己本具の心性をさとること。靈雲志勤（生没年不詳）の故事に由来する。（↓『碧巖録』七八）〔胡餅〕小麦粉のお焼き・煎餅の類。（↓七八則）〔攬槍〕慧星。〔十二処〕認識の主観的能力としての六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）と、客観的对象としての六境（色・声・香・味・触・法）のこと。〔三千界〕三千大千世界のこと。

第八十三則 道吾看病

〔本則〕 舉。滙山問道吾。甚麼處來。吾云。看病來。山云。有幾人病。吾云。有病者不病者。山云。不病者莫是智頭陀麼。吾云。病與不病。總不干他事。速道速道。山云。道得也沒交涉。

〔訓読〕

挙す。滙山道吾に問う。甚麼の処より来るや。吾云く、看病し来る。山云く、幾人有って病むや。吾云く、病者と不病者有り。山云く、不病者は是れ智頭陀なること莫しや。吾云く、病と不病とすべてに他の事に干らず。速やかに道え、速やかに道え。山云く、道い得るも也た没交涉。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。瀧山靈祐が道吾円智に尋ねました。「何処から来たのですか」と。道吾は「看病してきました」と答えました。瀧山は「どれほどの人が病んでいたのですか」と言いました。すると道吾が答えました。「病気の者も病気ではない者もいました」と。瀧山は「病気でない者は円智和尚、あなたではないのですか」と言いました。道吾は「衲は病でも不病でもありません。そのように尋ねる理由を速く答えて下さい」と言いました。瀧山が答えました。「それを言ったとしても、病・不病とは無関係になってしまおう」と。

【頌】

頌曰。妙藥何曾過口。神醫莫能捉手。若存也渠本非無。至虛也渠本非有。不滅而生。不亡而壽。全超威音之前。獨步劫空之後。成平也天蓋地擎。運轉也烏飛兔走。

【訓読】

頌に曰く。妙薬何ぞ曾て口に過さん。神医も能く手を捉ること莫し。若存や渠本無に非ず。至虚や渠本有に非ず。滅せずして生じ亡ぜずして寿し。全く威音の前を超え独り劫空の後を歩む。成平や天は蓋い地は擎ぐ。運轉や烏飛び兔走る。

【釈意】

何処から来たのかという質問は禪問答では単なる挨拶ではなく、根本を問うことが多い。道吾は場所を聞かれても何をしてきたかを返答し、病人の数を聞かれても病の者とそうでない者がいると答えた。これには瀧山の問いの意図を見抜いた道吾の応対が伺える。そこで瀧山は、不病（悟境）という分別が君に残っているのではないかと指摘した。道吾はこの問いに対して、迷悟の分別に滞ることなく、本質を既に掴んでいると境地を披瀝し、逆に滞りがあるのは瀧山ではないのかと問い詰めた。そこで瀧山は、ことばで悟境を表すことは誤りに陥ると答えて、道吾の応対を認めた。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。病・不病から解き放たれた人は、良薬を口にする必要もなく、名医の世話になることもありません。それはたとえ目に見えなくても存在しているので無ではなく、しかし、存在していても根源的有ではないのです。それは消滅しないで偏在し、不滅であるからこれから先も続いていくでしょう。最初の仏が現れるより前にあらわれ、この世界が消滅してからも続いてゆきます。それは空が世界の全てを覆い、大地が生けるものを余すことなく支えているようなものです。また、太陽と月が天空を運行するように真実そのものなのです。

〔語彙〕

【瀉山】瀉山靈祐（771〜853）、第十五則を参照。百丈懷海の法嗣。【道吾】道吾円智（769〜835）、第二十一則参照。薬山惟儼の法嗣。【智頭陀】智は道吾円智を指す。頭陀は乞食を行じる修行者から転じて僧侶のこと。【没交渉】何の関わりもないこと、また互いがそむいて応じないこと。【渠】それ、本来の面目、仏性のこと。【威音】法華経に説かれる最初に顕れた仏。無量無辺の最遠にたとえられる。また、父母未生以前の面目も指し、その場合は仏性を指す。【擎】持ち上げる、ささげる、差し出すの意。

〔釈意〕

本則は病・不病を主題として取りあげているが、頌ではそのような二見、分別を越えた存在の本質について語られている。それは、道吾も瀉山も共に分別に涉らない境地に達しているためである。この二人のような達道の人々は苦に動じることがないため、薬の効能や医者腕について一喜一憂することはなく、彼らが観ているものは病や健康という表面的な現象ではなく、自己の本源といえる仏性である。それは眼に見えるような実体としては捉えられないが、この世界に普遍的に存在し、過去から未来へと綿々と続いていくものとして語られている。

第八十四則 俱胝一指

【本則】 擧。俱胝和尚凡有所問只豎一指。

【訓読】 擧す。俱胝和尚 凡そ所問有らば只だ一指を豎つ。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。俱胝和尚は尋ねられた時はいつでも一本の指を立てて応じました。

【釈意】

俱胝が立てた一指には眼前には、この世界のすべてが収められている。言い換えれば、それは内もなく外もなく、一切の二元論的対立を超越して一つとなった姿といえる。俱胝はそうした仏教の極意をことばや理屈を用いることなく、たった一本の指で体現してみせたのである。

【頌】 頌曰。俱胝老子指頭禪。三十年來用不殘。信有道人方外術。了無俗物眼前看。所得甚簡施設彌寬。大千刹

海飲毛端。鱗龍無限落誰手。珍重任公把釣竿。師復豎起一指云看。

【訓読】 頌に曰く。俱胝老子 指頭の禪。三十年來用いて残さず。信に道人方外の術有り。了に俗物眼前に看ること無

し。所得甚だ簡にして施設彌寬し。大千刹海を毛端に飲む。鱗龍無限にして誰が手に落ちん。珍重す 任公の釣竿を把ることを。師復一指を豎起して云く看よ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。俱胝和尚の指を立てる禅は、和尚が三十年の間使っても、使い尽くすことができませんでした。これは実に常人の域を超えた方法です。そのため真実を求めることのない凡夫の目に映ることはありません。その所作はとても簡素ですが、修行者を教化する方途として無限の力を備えています。それはあたかも大海を一本の毛の先端に収めてしまうようなものです。無限に存在するという龍の鱗は誰の手に落ちたでしょうか。任公が釣り竿を手にとったことは喜ばしいことです。同じように覚和尚が優れた修行者を釣り上げるべく、また一指を立てています。「ひあ見なさい」と。

【語彙】

【俱胝】（生没年不詳）南岳門下の僧。尼僧の質問に答えられなかったことから、遍歴の旅に出る。大梅法常の法嗣の天龍和尚に参じた時、指を立てられたのを見て開悟した。【用不残】残は尽と同義。用い尽くさないこと。【施設】先を見越して作っておくことで、禅宗では修行僧を導くために設ける様々な方法や手段のことを言う。【任公】先秦の人、任公子は巨大な釣り針と糸を用意し、これに五十匹の牛を餌につけ東海に竿を垂れ、やがて巨大魚を釣り上げたという（『莊子』外物篇）。

【釈意】

俱胝は臨終の際に「三十年の間、一指の禅を使い切ることができなかった」と言い遺したという。宏智はこの言葉を頌の冒頭に引用している。こうした教化の方法を宏智は高く評価し、真摯な修行を不断に実践するものには有効であると説いている。世俗の人から見ればたかが一本の指でも、見るものが見ればその中に大海が広がるようだという。大魚を釣り上げたという任公子に俱胝をなぞらえ、彼の釣りあげた龍魚の鱗が無限であるように、衆生の誰もが悟る素養を持つていることを暗示している。

第八十五則 国師塔様

【本則】 擧。肅宗帝問忠國師。百年後所須何物。國師云。與老僧作箇無縫塔。帝曰。請師塔様。國師良久云。祖麼。帝曰。不會。國師云。吾有付法弟子耽源却諳此事。後帝詔耽源問此意如何。源云。湘之南潭之北。中有黃金充一國。無影樹下同舡。瑠璃殿上無知識。

【訓読】 挙す。肅宗帝 忠國師に問う。百年の後須うる所は何物ぞ。国師云く、老僧が与に箇の無縫塔を作れ。帝曰く、請う師塔様。国師良久して云く、会すや。帝曰く。不会。国師云く、吾に付法の弟子耽源有り 却つて此事を諳ず。後に帝 耽源に詔して此意如何と問う。源云く 湘の南潭の北。中に黄金有りて一國に充つ。無影樹下の合同舡。瑠璃殿上に智識無し、と。

【和訳】 諸君、よく聞きなさい。肅宗帝が南陽国師に問いました。「百年後に必要なものが何かありますか」と。国師は言いました。「この老僧のために墓塔を作ってください」。皇帝は言いました。「師よ、どのような形がよいか教えていただきたい」。国師はしばらくの間、黙っていた後に言いました。「解りましたか」と。皇帝は言いました「解りません」。国

【釈意】 歴史上では、肅宗帝は慧忠より先に没しているため、ここで肅宗帝とあるのは子の代宗帝（七二六〜七七九、在位・七六二〜七七九）の誤りであると思われる。おそらく慧忠の示寂直前のことであろう。帝は百年後ということばで、時間を超えて「真に必要なもの」は何であるかを尋ねている。それに対して慧忠は無縫塔を建てるといふ表現で、真の自己の確立を示した。師を尊敬する帝は言葉通りに受け取り、真意を会得できなかったため、このこと

師は言いました。「衲の弟子に耽源という者がおります。衲よりよくこのことを解っておりませぬ」といいました。慧忠の死後、皇帝は耽源を召し出して、どのような意味であったのかと問いました。耽源は言いました。「どこもかしこも、この世界すべてに黄金が満ちみちています。この世界は対立のない仏の教えという舟に乗っているようなものです。すべてが仏の世界で、誰もが仏なのです」と。

〔頌〕

頌曰。孤迴迴。圓陀陀。眼力盡處高峩峩。月落潭空夜色重。雲收山瘦秋容多。八卦位正。五行氣和。身先在裏見來麼。南陽父子兮却似知有。西竺佛祖兮無如奈何。

〔訓詁〕

頌に曰く。孤迴迴。円陀陀。眼力尽きる処高くして峩峩たり。月落ち潭空うして夜色重し。雲收り山瘦せて秋容多し。八卦位正しく五行氣和す。身先ず裏に在り見来るや。南陽父子却つて有ることを知るに似たり。西竺の仏祖も如奈何ともする無し。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。実に广大で深遠です。真円で完全無欠です。頂上が眼に見えないくらい高くそびえ立っています。月が沈み、川面に光が

に捉われることを避けるため、あえて慧忠は弟子の耽源に任せました。耽源は慧忠の意図を理解して、仏性はこの世界に満ちているのだから、そのことを自ら会得するようにすべきで、という意味の偈を述べた。この世界が仏の世界であり仏法のないところはないのだと、耽源は師とは異なる表現をしたのである。耽源は慧忠の法を正しく嗣いでおり、師の物まねではなく、家風を確立していることがわかる。

〔釈意〕

慧忠の境地は完全円満の一円相そのものである。ただし、代宗帝のように分別を以てそれを見ようとするなら、その姿ははるか高くそびえる山のように、全く捉えることはできない。円満な仏性

なくなつて、夜の景色は真つ暗闇になりました。雲がなくなり山容が現れて秋の静かな景色が目前にあります。八卦(乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌)の各位は正しく並び、五行(木・火・土・金・水)のすべてが整っています。慧忠国師の姿がそこに現れています。慧忠と耽源の師嗣は真実を見抜いています。たとえ天竺、震旦の優れた祖師方も、この二人には太刀打ちできないでしょう。

は誰もが備えているものである。慧忠と耽源の師嗣にはそのことがよく解っているの、仏祖でさえも何も口を挟む余地が無いのである。

【語彙】

【肅宗帝】唐の第七代皇帝(711〜763、在位・756〜762)。玄宗の第三子。安史の乱の最中に即位したが、乱を鎮定しきれず、戦禍のうちに治世を終えた。【忠国師】南陽慧忠(？〜775)。俗姓は冉氏。六祖慧能の法嗣。慧能門下の五大宗匠の一人に数えられる。肅宗と子の代宗の二代にわたって帰依を受け、大証国師と諡された。【百年後】没後。死後。【無縫塔】卵塔とも。四角または八角形の台座の上に卵形の塔見を載せた石塔で、主に禅僧の墓に用いられる。【耽源】法号は応真とも真応ともされる。生没年不詳。慧忠の侍者を務めていたともいわれるが詳細は不明である。【湘之南潭之北】(『碧巖録』第十八則)「どこもかしこも」の意。【无影樹下合同缸】影の無い樹はありえないが、それによつてももの実体の無いこと、幻のごとき存在性を示しており、そのもとはいかなる身分の違いも存在しないということ。【孤迴迴】はるかに離れて孤立するさま。廣大で深遠なさま。【円陀陀】丸くて佳麗な珠の如き様子。

第八十六則 臨濟大悟

【本則】 擧。臨濟問黃檗。如何是佛法的大意。檗便打。如是三度乃辭檗。見大愚。愚問。甚麼處來。濟云。黃檗來。愚云。黃檗有何言句。濟云。某甲三問佛法的大意。三度喫棒。不知有過無過。愚云。黃檗恁麼老婆爲爾得徹困。更來問有過無過。濟於言下大悟。

【訓読】 挙す。臨濟 黄檗に問う。如何なるか是れ仏法的大意。檗便ち打つ。是の如きこと三度 乃ち檗を辞し 大愚に見ゆ。愚 問う。甚麼の処より来るや。濟云く、黄檗より来る。愚云く、黄檗何の言句か有りしや。濟云く、某甲三たび仏法的大意を問うて、三たび棒を喫す。知らず過有りや無しや。愚云く、黄檗 恁麼に老婆 爾が爲に徹困なるを得たり。更に來つて有過無過を問う。濟 言下に大悟す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。臨濟義玄が黄檗希運に質問しました。「仏法の最も大切なところとは何でしょうか」と。すると黄檗は臨濟を打ちました。このような事が三度あり、臨濟は黄檗の下を去って、高安大愚に会いに行きました。大愚は質問しました。「どこから来たのか」と。臨濟は言いました。「黄檗はどこから来ました」と。大愚は言いました。「黄檗はど

【釈意】

臨濟義玄が師である黄檗希運に対して、仏法の本義について尋ねた。しかし、黄檗は一言も喋らず、臨濟を棒で打つことを三回繰り返しただけであった。仏とは自分自身であると識れ、の意であるが、この時の臨濟には会得できなかった。機縁が熟していなかったのである。臨濟は黄檗に指示を得て高安大愚に会いに行き、黄檗がどのような教えを示したのか問われる。臨濟は黄檗の行動の意図を理解できず、思わず大愚に愚痴を漏らしてしまう。

んな教えを君に示したのか」と。臨済は言いました。「衲は三度仏法の最要を質問して、三度棒で叩かれました。何か過ちが有ったのか無かったのか、わかりません」と。大愚は言いました。「黄檗は君のために、まるで孫に対する老婆のように徹底して親切だ。それなのに君はまだ、過ちの有る無しにこだわりの、迷っている」と。大愚が言い終わると、すぐに臨済は大いに悟ったのでした。

【頌】 頌曰。九包之鷁。千里之駒。眞風度籥。靈機發樞。劈面來時飛電急。迷雲破處太陽孤。捥虎鬚。見也無。箇是雄雄大丈夫。

【訓詁】 頌に曰く。九包の雛。千里の駒。真風籥を度し、靈機樞を発す。劈面に來る時飛電急なり。迷雲破る処太陽孤なり。虎鬚を捥づ。見るや也無や。箇は是れ雄雄たる大丈夫。

【和訳】 天童覚和尚が頌にいたしました。臨済は九つの徳を兼ね備えた鳳雛のようであり、一日千里を走る駿馬のようです。南風は笛の中を通して妙音を響かせ、靈妙な働きは細かく入り組んだからくりを開きます。

聞いた大愚は、「黄檗の丁寧な指導にも気付かず、自己に執着している」と指摘される。そこで臨済は、自己へのこだわりが悟道への障害であったことを理解し、達悟に至るのである。

【釈意】 ここでは臨済のことについて述べており、鳳雛や駿馬を例に述べて、今は未熟ながら素質が素晴らしい様に例えている。真風は南風のこと、南風が笛の中を通る様は、大愚が臨済を導いて修行を成就させたこと、靈妙な機転がからくりを開ける様は、臨済の

真実が正面から来る時は、稲光のようにあつという間です。迷う雲が破れて太陽が輝けば青空が現れます。黄檗の元に戻って一掌を与えたのは、虎の鬣を引つ張るように危ういものでした。このような人をこれまでに見たことがありますか。臨済はまさしく優れた立派な男です。

迷いがなくなつて悟りを開いたことを表している。そして、黄檗の警策をあつという間に来る稲光に喩え、臨済の迷いを雲に喩え、得悟を太陽が輝く青空と表現している。弁道の蓄積が、優れた手腕の正師に導かれれば、仏性は一瞬にして表れるという。黄檗と大愚の指導が卓越したものであることを表している。虎の鬣をなでることは、危険を顧みずに敵に立ち向かうことの例えであり、ここでは大愚下で悟った後、黄檗のもとに帰り、師を打ったことを表している。このことで仏として師の元から自立したのである。

〔語彙〕

〔臨済〕臨済義玄（?～867）のこと。中国臨済宗の開祖。曹州南華の人。〔黄檗〕黄檗希運（不詳）のこと。福州の黄檗山で出家。百丈懐海の弟子となり、その玄旨を得た。〔大愚〕（不詳）唐代の人。臨済義玄を接化した人として知られ、瑞州高安に住した。〔老婆〕老婆心の略。〔徹困〕心配する。〔九包之雛〕九つの徳を兼ね備えた鳳雛のことで、靈利の衲僧の例え。〔千里之駒〕一日に千里を走る駿馬のことで、後日大人物となるべき逸材の例え。〔箆〕三孔の竹管の楽器。〔靈機〕靈妙な機転のこと。〔劈面〕正面から。面と向かつて。〔大丈夫〕男子の美称。

第八十七則 疎山有無

〔本則〕擧。疎山到瀉山便問。承師有言。有句無句。如藤倚樹。忽然樹倒藤枯。句歸何處。瀉山呵呵大笑。疎云。某甲四千里。賣布單來。和尚何得相弄。瀉山喚侍者。取錢還者上座。遂囑云。向後有獨眼龍。為子點破去。

在。後到明昭舉前話。昭云。瀉山可謂。頭正尾正。只是不遇知音。疎復問。樹倒藤枯。句歸何處。昭云。更使瀉山笑轉新。疎於言下有省。乃云。瀉山元來笑裡有刀。

〔訓読〕 挙す。疎山瀉山に到つて便ち問ふ、承たまはれり師言へることあり、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、忽然として樹倒れ藤枯れなば、句何の処に帰すや。瀉山呵呵大笑す。疎山云く、某甲四千里に布単を売り來たる、和尚何ぞ相弄することを得たる。瀉 侍者を喚び 錢を取つて這の上座に還せと。遂に囑して云く、向後独眼龍あつて子が為に点破し去ることあらん。後に明昭に到りて前話を挙す。昭云く、瀉山頭正しく尾正しを謂ひつべし。只是れ知音に遇はず、と。疎復た問ふ、樹倒れ藤枯る、句何の処に歸するや。昭云く、更に瀉山をして笑ひ 転た新たならしむ。疎言下に於て省あり。乃ち云く、瀉山元來笑裏に刀あり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。疎山が瀉山に到着して尋ねました。衲は「有句無句は藤の樹に倚るが如し」と言われたと聞いています。もしそうならば、突然巻き付いていた樹が倒れた時、樹に巻き付いていた藤はどうなるのでしょうか、と。瀉山は呵呵大笑しました。疎山は云いました。「衲は反物を売りながら旅費を作り、はるばる四千里も歩いてやつと瀉山にたどりつきました。そんな衲をどうしてからかうことができるのですか」と。瀉山は侍者を喚び、この

〔釈意〕

「有句（偏位）と無句（正位）は本来の面目に一体となつて巻き付いている藤のようなものだ」という瀉山の言葉に関しての問答である。達悟したとき、凡夫としての自分に内在していた煩惱はどうなつてしまうのか、と質問したといつてもよい。それを聞いた瀉山は呵々大笑すること、いずれの姿も自分以外ではないと示した。瀉山は有句（偏位）と無句（正位）は一体のものであり、分けて考えることは分別であるという。後に疎山は明昭徳謙の処に行つてこの問答について話した。これを聞いて徳謙は、「瀉山が言つたことは始めから終わりまで完全無欠で正しい。し

修行僧に旅費を渡してやりなさいと言いました。そして、疎山に向かつて、「君はそのうち片目の偉い和尚に出会い、君の眼を開いてくれるだろう」と予言しました。後に疎山は明昭徳謙の処に行つて瀉山での話をしました。明昭は云いました。瀉山が言つたことは始めから終わりまで完全無欠で正しいのだが、残念なことにそれを分かる友人に会わなかつたのだ、と。疎山はまた同じことを聞きました。突然樹が倒れた時、巻き付いていた藤はどうなるのでしょうか、と。明昭は云いました。「柄も別に説きようはない。もう一度瀉山に大笑いしてもらうしかないでしょう」と。これを聞いて疎山は悟り、瀉山の呵々大笑には元来活殺自在の力がある、と言いました。

【頌】 頌曰。藤枯樹倒問瀉山。大笑呵豈等閑。笑裡有刀窺得破。言思無路絕機關。

【訓読】 頌に曰く。藤枯れ樹倒れて瀉山に問ふ。大笑呵豈に等閑ならんや。笑裏に刀あり窺得を破す、言思路なくして機關を絶す。

かし、残念なことにそれを君がわからなかつただけだ」と言つた。明昭はさらに、瀉山の教示以外に適切な方法はないと言ひ、これを聞いた刹那に疎山は瀉山の真意を悟り、「瀉山の呵々大笑は真実そのものであつた」と云つたのである。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。疎山は滙山に「突然樹が倒れた時、樹に巻き付いていた藤はどうなるのでしょうか」と聞きましたが、滙山は呵々大笑しただけでした。滙山の呵々大笑はおざなりなものではなく、一番適切な回答だと言えるでしょう。大笑いの裏には分別妄想を断絶する力があります。言葉や思慮で明らかにしようとしても近づくことはできません。

〔釈意〕

疎山は、仏としての自己と、凡夫としての自己があると想定し、悟道には煩惱の淘汰が必要であると思ひ込んでいます。滙山は、有無に関わらず、全て自分であることを大笑いで示すが、疎山は得悟にいたらず、明昭徳謙に導かれて開悟する。滙山の大笑いは、藤も大樹も共に切り倒してしまう力が秘められていた。

〔語彙〕

【疎山】匡仁（837〜909）のこと。廬陵（江西省）の人。洞山了价の法嗣。【藤枯れ】煩惱が消滅する喩え【樹】真の自己。仏性。【滙山】滙山靈祐（771〜853）、第十五・八十三則を参照。百丈懷海の法嗣。【等閑】なおざり。【呵呵】笑う様子。【窺得破】気づくこと。【笑裏刀】笑いの裏には分別妄想を切断する力がある。【言思路無くして機関を絶す】言葉や思慮で明らかにしようとして、分別では近づくこともできない、の意。

第八十八則 楞嚴不見

【本則】 擧。楞嚴經云。吾不見時。何不見吾不見之處。若見不見。自然非彼不見之相。若不見吾不見之地。自然非物。云何非汝。

〔訓読〕 挙す。楞嚴經に云く、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の処を見ざる。若し不見を見るといはば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらん。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。『首楞嚴經』に次のように記されています。もし見るということが客観的な行為であるならば、柄が見ないということ（不見）も客観的行為として見るができるはずで、しかし、柄が見ない時（不見）には、それは見えません。どうして柄が見ないこと（不見）が見えないのでしょうか。もし、柄の不見のところ君に見えるならば、それはもう不見の相とは言えません。君が柄の不見の地を見ることができないのは、見るといふ働きが本物ではないからです。見るといふ働きが君の本性そのものだからです。

〔頌〕 頌曰。滄海瀝乾。太虛充滿。衲僧鼻孔長。古佛舌頭短。珠絲度九曲。玉機纔一轉。直下相逢誰識渠。始信斯人不合伴。

〔訓読〕 頌に曰く、滄海を瀝乾し、大虚に充滿す。衲僧鼻孔長く、古仏舌頭短し。珠糸九曲を度り、玉機わずかに一転す。直下に相逢う誰か渠を知らん。始めて信ず斯の同伴うべからざること。

宏智禪師頌古百則の研究（四）（佐藤）

〔釈意〕

『首楞嚴經』はブツダと阿難の対話により構成される。しかし、引用された『首楞嚴經』の文章は一部が省略された不完全な文節である。『首楞嚴經』第二卷の經文は次のようになる。「もし見これ物ならば、即ち汝、吾が不見を見るべし。もし同じく見るをば名づけて吾を見るとせんなら、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の処を見ざる。もし不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。もし吾が不見の処を見ずんば、自然に物に非ず。いかんが汝にあらざらん」この則で示されているのは、我々にとって「今」と云う時をどのように認識すればよいのかとの点にある。見たといえは過去の出来事であり、未だ見ていないといえは未来のことである。その何処に「今」があるといえるのであろう。主客未分の「今」にこそ、我々の本性（本来の面目）の働きや作用あるというのである。未分であればこそ、迷にも悟にも属さない真実が現れるのである。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。煩惱妄想の海を一滴も残さず乾かせば、大虚に充滿して明々歴々露堂堂の世界に出ることが出来ます。その時、十方世界は自己の光明となるでしょう。その世界を体験した禅僧の意気はあくまでも高く、古仏といえども悟りの世界を説明することはできません。曲がりくねって、通り抜けることが困難な道のような分別妄想を掃蕩すれば、機織り機がわずかに一転するように、迷から悟に転じることが出来ます。そこで出会う彼とは誰のことでしょう。この人とはいいつも一緒にあったと思っていました、実は私自身のことだったのです。

〔語彙〕

【滄海】大海。思想の海。煩惱妄想のたとえ。【瀝乾】一滴も残さないように乾かすこと。【鼻孔】鼻の孔ではなく、鼻のこ
と。【衲僧鼻孔長く】その世界を体験した禅僧の志気はあくまでも高い。【古仏舌頭短し】古仏といえども「滄海を瀝乾し、大
虚に充滿した世界」を説明することはできない。【珠系九曲を度り】孔子の故事。孔子が陳の国に拘留されていた時、九曲の
小さな穴が開いた玉に糸を通せという難題を出された。孔子は蟻を糸で縛り玉の穴に入れた。そして、出口の穴に蜂蜜を塗り
付けた。蟻は蜂蜜の香りを求めて出口の穴から出てきた。それで九曲の珠に糸を通すことができたという。ここではこの故事
を分別妄想の曲がりくねった穴道を通り抜けて悟りの世界に出ることを喩えている。【珠系九曲を度り、玉機わずかに一転

〔釈意〕

煩惱の海を干上がらせてみれば、どこもかしこも真実そのものであると説いている。これをことばで表そうとすれば、祖師といえども説くことができないが、真実はことばで表せるか否かに関わらず、「ここ」に存在するのである。真実の人を求めて修行を完
成させてみれば、真実の人とは衲自身のことであった。

す】曲がりくねった分別妄想を掃蕩し、玉機わずかに一転するようない転機を経て、悟りの世界の世界に出ること。【渠】本来の面目。真の自己。【斯人伴うべからざることを】この人には誰も同伴者はいない。宇宙に唯一の存在であること。【直下相逢うて誰か渠を知らん。始めて信ず、斯人伴うべからざることを】僅かな距離もなく、真の自己と直接接して、会っているのに未だ分からないとは言わせない。この人には誰も同伴者はいない。宇宙に唯一の存在であることをよく知れ、の意。

第八十九則 洞山無草

【本則】 擧。洞山示衆云。秋初夏末。兄弟或東或西。直須向萬里無寸草處去。又云。只如萬里無寸草處。作麼生去。石霜云。出門便是草。大陽云。直道。不出門亦是草漫漫地。

【訓読】 擧す。洞山衆に示して云く、秋初夏末 兄弟或いは東し或いは西す。直に須らく万里無寸草の処に向いて去くべし。また云く、只 万里無寸草の処の如き 作麼生か去ん。石霜云く、門を出づれば便ち是れ草。大陽云く、直に 道わん 門を出でざるも亦これ草漫漫地。

〔和訳〕
諸君、よく聞きなさい。洞山良价が大衆に向かっていいました。「夏安居が終わり、秋を迎えると、弟子たちは東や西にそれぞれ行きます。ひたすら草が生えていない万里の道を歩みなさい」と。また洞山は「ただ、草が生えていない万里の道に行くには、

〔釈意〕
夏安居が終わり、修行僧は次の安居が始まるまで各地を転々とす。万里は遠い道を転じて修行者が歩む道を指し、草はその修行中に起こる様々な煩惱による心の働きを意味する。煩惱がある世界でも真実の世界であるからこそ、洞山は夏安居が終わったあと、どのように安居中の無分別心を維持するのかを聞いている。

どのような方法で行けるのでしょうか。わかりますか」と聞きました。石霜慶諸は「修行道場から出れば、草はどこにでも生えています」と言いました。後から大陽警玄が「修行道場を出なくても、常に草はあらゆる所に生えています」と言いました。

悟りの境地に達したとしても、外の世界の煩惱によって惑わされては意味がない。そこで石霜は外の世界は草が生えている煩惱の世界であろうとも、安居中と何も変わらないありのままの自己を保つように言うのである。さらに大陽は安居期間だけでなく、修行中においても油断していると心が揺れ動いて煩惱に惑わされてしまうことを補足するのである。

【頌】

頌曰。草漫漫。門裏門外君自看。荆棘林中下脚易。夜明簾外轉身難。看看。幾般般。且隨老木同寒瘡。將逐春風入燒瘢。

【訓読】

頌に曰く。草漫漫。門裏門外君自ら看よ。荆棘林中脚を下すこと易し。夜明簾外身を転ずること難し。看看。看よ。幾般般。且つ老木に随いて寒瘡を同うし、將に春風を逐うて焼瘢に入らんとす。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。草は限りなく生えています。それは修行道場の内にも外にも生えているので、あなた自身で見極めなければなりません。いばらの林から抜け出るのは簡単です。しかし、夜に水晶で出来た簾をめくってなかに入ることは難しいものです。皆識るべきです、識るべきです。それ

【釈意】

「荆棘林中」は叢林での厳しい修行を指し、「夜明簾外」は悟後の様をいう。末尾の二句は、この二句の言い換えである。悟道の後も仏向上へと道は続いているのである。

がどれほど困難であるかということ。しばらくは老木に身を寄せて冬の寒さに耐えるがいいでしょう。やがて春の暖かい風が吹いて、新芽が顔を出すでしょう。

〔語彙〕

【洞山】洞山良价（807〜869）のことで青原下。【万里無寸草】万里は極めて遠いこと。また広いこと。万里無寸草は万里の間に草が一本もないこと。草は縛りつくことを意味し、煩惱のたとえ。【石霜】石霜慶諸（807〜888）のこと。洞山と同じく青原下。道吾円智の法嗣。【大陽】大陽警玄（943〜1027）曹洞宗。【漫漫】果てしなく広いさまのこと。【荆棘林】荆棘は、いばらのこと。転じて煩惱や邪見などの意味。それが林であることから、いばらの林のこと。菩提の悟りの世界に対して煩惱の迷いの世界のこと。向下の和解などをいう。【夜明簾】水晶・白玉でつくった簾のこと。夜になっても光ることから、悟りの境地を指す。【幾般】数種類の、また、いかなるたぐいの。

第九十則 仰山謹白

【本則】 擧。仰山夢往彌勒所。居第二座。尊者白云。今日當第二座説法。山乃起白椎云。摩訶衍法。離四句絶百非。謹白。

〔訓読〕 挙す。仰山夢に弥勒の所に往いて、第二座に居す。尊者白して云く、今日第二座の説法に当たれり。山乃ち起て白椎して云く、摩訶衍の法は四句を離れ百非を絶す。謹んで白す、と。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。仰山慧寂は夢の中で弥勒菩薩に出会い、会下の第二座になっていました。尊者が申します。「今日は第二座の仰山が説法を行います」と。仰山が立ちあがって鎚を打ち、「仏の教えはあらゆる分別を離れることです」と大衆に謹んで告げました。

〔釈意〕

仰山は仏教の教えは様々な分別から離れることであると述べている。第一則の「世尊陞座」では、釈尊の前で文殊菩薩が鎚を打って説法を行っている。仰山は仏法の教えを説くと共に、文殊師利が行った体技を用いて説法を行ったのである。また、仰山の説法の背景には、夢の中で弥勒菩薩との出会いや文殊師利の用いた説法など、最も釈尊に近い祖師らに対しての尊敬の念を表しているとも言える。しかし、最大の論点は、「夢の中」である。「四句を離れ百非を絶す」るのも、分別という夢の中のことであり、非としなければならぬ。

〔頌〕

頌曰。夢中擁衲參耆舊。列聖森森坐其右。當仁不讓犍椎鳴。説法無畏獅子吼。心安如海。膽量如斗。鮫目泪流。蚌腸珠剖。謔語誰知泄我機。龐眉應笑揚家醜。離四句絶百非。馬師父子病休醫。

〔訓読〕

頌に曰く。夢中衲を擁して耆旧に参す。列聖森森として其の右に坐す。仁に当たつて譲らず 犍椎鳴る。説法無畏獅子吼す。心安きこと海の如く。胆の量斗の如し。鮫目 泪流れ、蚌腸 珠培う。謔語誰知らん 我が機を泄らすことを。龐眉心に笑うべし 家醜を揚ぐることを。四句を離れ百非を絶す。馬師父子 病に医を休む。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。夢の中で衲は徳の高

〔釈意〕

仰山が鎚を打って放った説法は、真実は眼前にあるということ

い祖師に参じて、歴代の祖師方が並ぶ横に坐りま
す。指名され、誰にも譲らずに鎚を打ち鳴らしま
す。その説法は的確であり、確信をもって師は大き
い声で言いました。心は平穩な海のように広く剛胆
で余裕があります。内容は鮫の涙が真珠となるよう
に、慈悲に満ちています。また、ハマグリが内蔵を
見せるように隠すところは何もありません。夢の中
で仏法の秘密を漏らしたことを誰が知っているで
しょう。祖師菩薩は仰山の説法を笑うことでしょ
う。しかし、分別を離れて真実を説くのに、馬祖の
ように手段を用いませんでした。

あつた。分別を離れば、この世界こそ唯一の真実であることが
会得できる。そこに疑う余地はないが、この世界が真実であらね
ばならないと思ひ込むことは、仰山が夢の中で説法したことと同
じく幻想となる。最後に馬祖をとり上げるのは、仰山が南嶽系統
だからであろうか。

【語彙】

【仰山】仰山慧寂(807〜883)のこと。滄山の人で、滄山靈祐の法嗣。【弥勒】弥勒は五六億七千万年の後に閻浮提に下生し、
釈尊の次に成仏するとされる菩薩。南方インド出身の實在人物であつたらしく、それがやがて将来佛とされるようになり、大
乗教典等では弥勒菩薩として随処に説かれている。※文殊師利は佛位に次ぐ法王の位にある文殊師利の意味である。諸菩薩の
なかで、文殊師利は智慧第一とされている。【第二座】首座を第一座と呼ぶのに対して、書記のことを第二座という。【白椎】
禪院で何か行う時に、大衆に知らせるために鎚を打つこと。白は申すこと。【摩訶衍】大乘のこと。【四句百非】四句は四句分
別のことで、全ての分別判断のことをいう。百非は否定の意。【耆舊】法臘五十歳以上の徳望高い出家人をいう。【列聖】歴代
の天子のこと。ここでは歴代の祖師のこと。【仁】あなた。ほぼ同じ身分の者の間という。また、やや上位の者に対して言う
ことも。丁寧な気持ちを意味する。【無畏】真理について正しく知り、確信をもって語り、なんら不安・疑惑を存しないこ
と。【龐眉】長い眉や太い眉のこと。【家醜】我が家の醜さで、家風を謙讓していること。家醜外に揚ぐで、我が家の恥をさら

すこと。宗義を外に向つて表詮すること。表詮は肯定すること、または表示すること。

第九十一則 南泉牡丹

【本則】 擧。南泉因陸巨大夫云。肇法師也甚奇特。解道。天地同根萬物一體。泉指庭前牡丹云。大夫時人見此一株花如夢相似。

【訓読】 擧す。南泉因に陸巨大夫云く、肇法師也た甚だ奇特なり。道うことを解す、天地同根万物一体と。泉庭前の牡丹を指して云く、大夫時の人此一株の花を見ること夢の如くに相似たり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。ある日、陸巨大夫が話のついでに南泉普願にこう言いました。「僧肇法師という人は大変優れた方ですね。天地万物はすべてその本体は同一である、とは実にうまく言い当てています」と。すると南泉は庭前の牡丹を指差してこう言いました。「大夫よ、今時の人はこの一株の牡丹を、まるで夢の中で見るように見ているのですね」と。

〔釈意〕

陸巨大夫は僧肇の言った「天地同根万物一体」という語に感心して、それこそが仏教の本質であるのだろうと師の南泉に話しかけた。それに対し南泉は目の前の牡丹を自分の目できちんと見るように促した。目の前の牡丹を素直に見ればそれでよいものを、理論を加えて自分の中に引き込み、まるで夢の中で幻想を見ているかのような大夫の姿勢は誤りと示した。分別に留まった知解を何かありがたい教えのように奉じることは、真実を見誤ることと示したのである。

【頌】 頌曰。照徹離微造化根。紛紛出沒見其門。游神劫外問何有。著眼身前知妙存。虎嘯蕭蕭巖吹作。龍吟冉冉洞雲昏。南泉點破時人夢。要識堂堂補處尊。

【訓読】 頌に曰く。離微造化の根に照徹し、紛紛たる出沒其の門を見る。神を劫外に遊ばしめて問うて何か有らん。眼を身前に著けて知妙に存す。虎嘯けば蕭蕭として巖吹作り、龍吟すれば冉冉として洞雲昏し。南泉時人の夢を點破す。堂堂たる補處の尊を識らしめんと要す。

【和訳】

天童覺和尚が頌にいたしました。万物の根源を見通し、様々に入り乱れている諸法の実相を見なさい。心を空劫の境界に置けば、何の差し障りもないのです。父母未生前に着目して普遍のものを知るので、虎が嘯けば、びゅうびゅうと音をたてて岩の間から風が起こり、龍が歌いだすと雲がもくもくと湧き出て空を暗くします。南泉はさまよっている人を夢から覚ましました。それは、その人自身が弥勒菩薩であることを知らしめるためです。

【釈意】

機会があるたびに思慮分別は発生するものであり、そのことにより一々心を動かされることなく諸法の実相を見るように心がけるべきである。虎が嘯いて風が起こることも、龍が歌いだして雲が起こることも、すべてありのままのことである。そのことが分かれば、自身が弥勒菩薩であることに気が付くだろう。

【語彙】

【南泉】 南泉普願（748～834）のこと。馬祖道一の法嗣。【陸巨大夫】 蘇州（江蘇省）の人。字は景山、官は戸部部中・太常少卿。觀察使、さらに御史大夫となり陸巨大夫と称される。南泉普願に師事し、また、さかんに禪客と交わりをなした。【肇法師】 僧肇（374～414）のこと。長安（陝西省）の人。鳩摩羅什に師事し、四哲の一人に数えられる。中国禪に多大な影響を与え

た。【天地同根万物一体】『宝藏論』涅槃無名論の引用。天地万物はみなその本体は同一であるという意味。【照徹離微造化根】『宝藏論』からの引用。離微は空の色、造化根は万物発生の根源、照徹は見通すことという意味。【游神劫外】劫は四劫のことであり、ここでは空劫を指す。自らの精神を何にも固定させない境界に置くという意味。【身前】父母未生以前のこと。【堂堂補處尊】堂々たる威風をもった弥勒菩薩。

第九十二則 雲門一寶

【本則】 擧。雲門大師云。乾坤之内。宇宙之間。中有一寶秘在形山。拈燈籠向佛殿裏。將三門來燈籠上。

【訓詁】 擧す。雲門大師云く。乾坤の内、宇宙の間。中に一宝ありて形山に秘在す。燈籠を拈じて仏殿裏に向う。三門を將て燈籠上に來たる。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。雲門文偃大師がこう言いました。「この天地の内に、また、宇宙の間に、その中にただ一つの宝がある。それは我々の肉体の中に秘められている。これにより、灯籠を点けて仏殿内に持ってゆくこともできる。また、三門を灯籠の上に置くこともできるのだ」と。

〔釈意〕

雲門は、修行僧がしばしば仏性に優劣があるように錯覚することに対し、自己の心の在り方に優劣などは無く、自分の存在の真実は今ここにある自己のみであることを、「宝」という語で示した。そして分別によらずにあるがままの姿で修行を行うべきであると説いたのである。第十九則からの関連性が考えられる。

【頌】

頌曰。收卷餘懷厭事華。歸來何處是生涯。爛柯樵子疑無路。桂樹壺公妙有家。夜水金波浮桂影。秋風雪陣擁蘆花。寒魚著底不吞餌。興盡清歌却轉槎。

【訓詁】

頌に曰く。餘懷を收巻して事華を厭う。帰り来りて何の処か是れ生涯。爛柯樵子路無きかを疑う。桂樹の壺公妙に家あり。夜水金波桂影を浮ぶ。秋風雪陣蘆花を擁す。寒魚底に著いて餌を吞まず。興尽きて清歌却つて槎を転ず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。心に思うことをすべて閉じて、一切の煩わしさを捨てなさい。そうでなければ、巡り巡って一生の間、居場所に迷い続けるでしょう。樵は腐った斧を持ちながら何か方法がないかと迷っています。壺公は桂樹に美しい家を持っています。夜の水面はきらきらとした月影を映しています。秋の風の中、白い蘆の花が咲き乱れています。寒いときには、魚は餌を食べずにじっとしています。釣り人も興ざめしてしまい、歌を歌いながら小船を転じて帰路につきました。

【釈意】

修行僧は分別に捉われて迷いから抜け出せずにいるのであろう。月影、蘆花、釣り人のいずれも一宝のたとえである。自己の存在を知り、而今の自己意外に自己はないことを明確にして、自分から離れないことが重要である。

【語彙】

【雲門大師】雲門文偃（864～949）のこと。嘉興（浙江省）の人。雪峰義存の法嗣。【乾坤】天地。【宇宙】宇は天地四方、宙は往古今來の意味。つまり天地を指す。【一寶】ここでは人間の体そのものという意味。【形山】形は肉体を指し、肉体には五蘊（色、受、想、行、識）が積み重なっていることから形山という。【三門】三解脱門（空門、無相門、無願門）のこと。悟りに

通ずる入り口のこと。【餘懷】心に思っているだけで、いまだに実行に至っていないこと。【事華】多事繁華の略。【爛柯】腐った斧。【桂樹壺公妙有家】費長房（生没年不詳）が仙人の壺公とともに桂樹に掛けてある壺の中に飛び込んでみると、そこに仙界が広がっていたという故事による。【金波】月のこと。【桂影】月影のこと。

第九十三則 魯祖不會

【本則】 擧。魯祖問南泉。摩尼珠人不識。如來藏裏親收得。如何是藏。泉云。王老師與汝往來者是。祖云。不往來者。泉云。亦是藏。祖云。如何是珠。泉召云。師祖。祖應諾。泉云。去。汝不會我語。

【訓読】 挙す。魯祖 南泉に問う。摩尼珠 人識らず、如來藏に親しく收得す。如何なるか是れ藏。泉云く、王老師と汝と往來するもの是。祖云く、往來せざる者は。泉云く、亦是れ藏。祖云く、如何なるか是れ珠。泉召して云く、師祖。祖 応諾す。泉云く、去れ、汝 我が語を會せず。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。魯祖宝雲が南泉普願に質問しました。「摩尼珠は誰も気がつかず、如來藏の中に直接しまわれているそうです。この如來藏とはどのようなものでしょうか」と。南泉は言いました。「この王老師と君の間を行ったり来たりしているものがそれだ」と。魯祖は言いました。「行ったり来

【釈意】

魯祖宝雲が南泉普願に質問しているが、魯祖は南泉の法兄にあたる。そのような関係で「師祖」「汝」と呼び掛けるのは不審である。魯祖は如來藏と摩尼宝珠を題材にしているが、元は永嘉玄覺の『証道歌』の中の語で、仏に至れば全ての物事は思いのままであるという意味である。南泉は君も柄も仏であり、どのような場合でも、仏であることに変わりはないとした。さらに、魯祖は摩

たりしないものはどうなのでしょいか」と。南泉は言いました。「これもまた如来蔵だ」と。魯祖は言いました。「摩尼珠とはどのようなものでしょいか」と。南泉は魯祖を呼び寄せました。「師祖よ」と。魯祖は返事をしました。南泉は言いました。「立ち去りなさい。君は衲のこつばを理解していなようだ」と。

【頌】 頌曰。別是非。明得喪。應之心指諸掌。往來不往來。只這俱是藏。輪王賞之有功。黃帝得之罔象。轉樞機能伎倆。明眼衲僧無鹵莽。

【訓読】 頌に曰く。是非を別ち、得喪を明かし、之の心に応じて諸掌を指す。往來不往來。只這れ俱に是れ藏。輪王之を有功に賞し、黃帝之を罔象に得たり。樞機を轉じ伎倆を能す。明眼の衲僧鹵莽なること無かれ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。良し悪しをはつきりさせ、得失を明らかにし、そのことを心の思うままに自由に使うことができ、掌に載せて指し示します。往來するものもないのも、すべてそのまま如来蔵なのです。轉輪淨王が手柄ある者に賞を与えたよ

尼珠とは何かと南泉に問い、南泉の呼びかけに対して、分別を働かせずに応じたことで、南泉はこの無分別こそが如来蔵であり、それでよしとしたのである。

【釈意】

前半は如来蔵、後半は摩尼珠について述べている。物事の良し悪し、得失をはつきりさせることは、物事を心の思うままに自由にするので、そのあるがままの状態こそ如来蔵であるとした。そして、根と境が関わるも関わらざるも、あるがままの状態で存在するとした。それはあたかも、黃帝のなくした珠を、盲目であり

うに、黄帝がこれを罔象から得たように、物事の大事な部分を動かす腕前を發揮します。眼を具えた禅僧は軽率であつてはいけません。

ながら聡明な者達より真つ先に見つけた罔象のような、ありのままに物事をとらえる人物をいうのである。禅僧は自身の本質を見極めるにあたつて決して軽率であつてはならないのである。

【語彙】

【魯祖】魯祖宝雲（不詳）のこと。中唐の人。池州魯祖山に住した。しかし、ここでは南泉の弟子であつた雲際師祖のことである。【南泉】南泉普願（748～834）のこと。俗姓は王氏で「王老师」というのは南泉自身を指す。馬祖道一の法嗣。【摩尼珠】摩尼・如意珠・如意宝珠とも。全ての物事を思う通りに叶えてくれるという珠。【如来藏】仏性とも。衆生のうちにある成仏の可能性。仏と違わない本来清らかな心。【師祖】雲際師祖（不詳）のこと。唐代の人。南泉普願の法嗣。【得喪】得ることと失うこと。【輪王】転輪聖王のこと。仏教では三十二相・七宝を具備するとされ、天から感得した輪宝を転がして四州を治める。【黄帝】中国の古代伝説上の帝王。三皇五帝の一人。【衲僧】衲子とも。禅僧のこと。【鹵莽】お粗末なこと。軽率。

第九十四則 洞山不安

【本則】 擧。洞山不安。僧問。和尚病。還有不病者麼。山云。有。僧云。不病者還看和尚否。山云。老僧看他有分。僧云。和尚看他時如何。山云。則不見有病。

【訓読】 擧す。洞山不安。僧問う、和尚病む。還つて病まざる者ありや。山云く、有り。僧云く、病まざる者は還つて和尚を見るや否や。山云く、老僧 他を見るに分有り。僧云く、和尚 他を見る時如何。山云く、則ち病有ることを見ず。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。洞山良价は体調不良でした。その時、ある僧が質問しました。「和尚は病気になるりましたが、病気になる者はいいますか」と。洞山は言いました。「いる」と。僧は言いました。「病気になる者とは和尚を看病するのでしょうか」と。洞山は言いました。「衲には彼を看病する義務がある」と。僧は言いました。「和尚が彼を看病するのはどういうことでしょうか」と。洞山は言いました。「その時は病気ではない」と。

〔頌〕

頌曰。卸却臭皮袋。拈轉赤肉團。當頭鼻孔正。直下髑髏乾。老豎不見從來癖。少子相看向近難。野水瘦時秋潦退。白雲斷處舊山寒。須剿絕。莫顛預。轉盡無功伊就位。孤標不與汝同盤。

〔訓読〕

頌に曰く。臭皮袋を卸却し、赤肉団を拈轉す。當頭鼻孔正しく、直下髑髏乾く。老匠從來の癖を見ず。少子相看して向近すること難し。野水瘦する時秋潦退き、白雲断ゆる処旧山寒し。須らく勦絶すべし。顛預すること莫れ。無功を転尽して伊れ位に就く。孤標汝と盤同じうせず。

〔釈意〕

僧はこの質問で「病気になる者とならない者」に分けて、悟と未悟の分別にとらわれていることを露わにしまった。洞山は導くために話を合わせて「ある」と返答した。この質問における「病気になる者」とは分別に迷わない者の意であり、仏のことといえる。次の「病気でない者が病人を見る」ということは「順」であり、片方の形に過ぎない。それ故、洞山は「逆」を示して、「衲が仏を見る」と示した。修行によって得悟の後には、世俗での慈悲行の実践がなければ、仏道の完成とはいえないといひ、「衲には衲なりの仏の見方がある」といひ、「衲には誰もが仏に見える」と答えたのである。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。煩惱をなくすことで、柄という束縛がなくなります。その時に本来の面目を得られ、情識を脱して真の自己を得ることができます。経験豊かな医者も過去の状態を知る必要がありません。経験のない未熟な者にとっては、対面して近付いていても見抜くことは難しいのです。野を流れる川が枯れる時、秋の水たまりもなくなり、白雲がなくなると、故郷も寒くなるのです。必ず根絶やしにするべきです。ぼんやりしてはなりません。悟りの世界から転出して、真の自己を得たのです。洞山は一人抜きん出ていて、あなた方と同じ世界にはいいのです。

【語彙】

【洞山】洞山良价（807～869）のこと。曹洞宗の祖。俗姓は兪氏。【老僧】老年の僧の自称。【臭皮袋】汚い皮袋のこと。そこから転じて、人間を軽蔑するという言葉。【赤肉團】肉体のこと。【當頭】その時。【癖】病のこと。【秋潦】秋の水たまりのこと。

【剗絶】心中の疑情を滅し尽くすこと。【顛預】ぼんやりとする様のこと。【孤標】一人抜きん出ること。

【釈意】

分別に滞る状態を脱したなら、自己を含めてあらゆる者の真実相を見抜くことができる。その時、見抜いているという分別もなく、ただありのままに受領しているのである。無功とは悟りの境地を指していて、悟りの世界からさえも抜け出たということである。洞山に並び立つ者はおらず、真の道者であるという。

第九十五則 臨濟一画

【本則】 擧。臨濟問院主甚處來。主云。州中糶黃米來。濟云。糶得盡麼。主云。糶得盡。濟以拄杖一畫云。還糶得這箇麼。主便喝。濟便打。次典座至。擧前話。座云。院主不會和尚意。濟云。爾又作麼生。座便禮拜。濟亦打。

【訓読】 擧す。臨濟院主に甚の処よりか来るやを問う。主云く、州中に黄米を糶り来る。濟云く、糶得し尽すや。主云く、糶得し尽す。濟拄杖を以て一画して云く、還つて這箇を糶得せんや。主便ち喝す。濟便ち打つ。次に典座至る。前話を擧す。座云く、院主和尚の意を会せず。濟云く、汝又作麼生。座便ち禮拜す。濟亦打つ。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。臨濟義玄が院主にどこへ行つてきたのかと問いました。院主は言いました。「市中で米を売つてまいりました」と。臨濟は言いました。「全て売りましたのか」と。院主は言いました。「売りつくしました」と。臨濟は拄杖で一字を書いて言いました。「それならばこれも売つてきたのかね」と。院主はすぐさま大喝一声しました。それを受けて臨濟はすぐさま拄杖で院主を打ち

【釈意】

本則は、「臨濟州中黄米」とも呼ばれ、臨濟の代表的な商量として知られている。臨濟の問いに対し、院主はその意味が解らず、米を売りつくしたと答えている。臨濟は、修行の完成を問うのであるが、院主は気づかないため、さらに会得させようとして院主の面前で一画を書き、分別の有無を尋ねた。これで気付いた院主は一喝したものの、臨濟の受け売りに過ぎないことから一打されたのである。次の場面において典座は、分別を脱したという自己への意識が禮拜によつてさらけ出されたため、臨濟は典座にも一

ました。やがて典座が現れたので、臨済は院主との問答を典座に提起しました。典座は言いました。「院主は和尚の意図を理解できなかったようですね」と。臨済は言いました。「では、君はどうなのだね」と。典座はすかさず礼拝しました。それを受けて臨済は、今度は典座を拄杖で打ちました。

【頌】 頌曰。臨済全機格調高。棒頭有眼辨秋毫。活人劍。殺人刀。倚天照雪利吹毛。一等令行滋味別。十分痛處是誰遭。掃除狐兔家風峻。變化魚龍電火。活人劍。殺人刀。倚天照雪利

【訓読】 頌に曰く。臨済の全機格調高し。棒頭に眼あり秋毫を弁す。狐兔を掃除して家風峻なり。魚龍を変化して電火焼く。活人劍。殺人刀。天に寄って雪を照らし吹毛を利す。一等に令行して滋味別なり。十分の痛處是誰か遭わん。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。臨済のはたらきは実に素晴らしいものです。きわめて審細に様子を見て、的確に一打を与えています。その手法は一切の障害を取り払うほどに峻烈です。魚を龍とするために雷を発して尾を焼いています。臨済の一打は人を活かす劍にも、人を殺す刀にもなりません。天の光

打を与えたのである。臨済の化導の懇切に僧が気付かないという問答は、この他にも「臨済禍事」「臨済録」(上堂)などがある。

【釈意】

頌では臨済を手放しで賞賛している。臨済の接化の方法は、簡素にして的確であり、決して隙を見逃すことはない。会下の修行僧の理解度を正確に把握して、ここぞというときに一打を与えている。それは未熟な修行僧の迷いを払うことに一切のためらいを見せないという臨済の心構えの厳しさを表している。急流を上って龍となろうとしている鯉に対して、雷を発して激励している。

によつて、その鋭さがより一層際立っています。臨濟の一打は一貫していて、その深い味わいは他とは別格のものです。これを受けた院主と典座は一層の精進を尽くしたでしょう。

臨濟の教示は親切で的確であるがゆえに、直下に会得できる修行僧がいる一方で、かえつて迷いを深める修行僧も現れてしまう。しかしながらその手法は天下に鳴り響いている。

【語彙】

【臨濟】臨濟義玄（?～867）のこと。中国臨濟宗の開祖。曹州（山東省）南華の人。俗姓は邢氏。黄檗希運の法嗣。【院主】寺院において事務一切を主宰する役職。監院、監寺とも。【拄杖】身体を支える杖。禪門では行脚時に用い、また法を説く時の道具として用いられる。【典座】禪寺において食事を司る役職。【棒頭有眼】棒頭を活眼とする機用のこと。一棒を打つにも的確に打つのであり、みだりには打たないことをいう。【変化魚龍】「登龍門」の話を指していると思われる。【令行】仏祖の法令を行うこと。【吹毛】吹毛劍の略。吹きかけた毛をも切るほどの鋭利な劍。転じて禪者の力量を指す語。【十分痛処】ここしかないという箇所。物事を会得したという意味。

第九十六則 九峰不肯

【本則】

舉。九峰在石霜作侍者。霜遷化後。衆欲請堂中首座接續住持。峰不肯。乃云。待某甲問過。若會先師意。如先師侍奉。遂問。先師道。休去歇去。一念萬年去。寒灰枯木去。一條白練去。且道。明甚麼邊事。座云。明一色邊事。峰云。恁麼則未會先師意在。座云。爾不肯我。那裝香來。座乃焚香云。我若不會先師意。香煙起處脫去不得言訖便坐脫。峰乃撫其背云。坐脫立亡則不無。先師意未夢見在。

【訓読】

挙す。九峰石霜に在つて侍者と作る。霜遷化の後、衆堂中の首座を請して住持を接統せしめんと欲す。峰肯わず。乃ち云く、某甲が問過せんを待て。若し先師の意を会せば、先師の如くに侍奉せん。遂に問う。先師道く。

休し去り 歇し去り、一念万年にし去り、寒灰枯木にし去り、一条白練にし去ると。且く道え、甚麼辺の事を明かすや。座云く、一色辺の事を明かす。峰云く、什麼ならば則ち未だ先師の意を会せざる在り。座云く、爾我を肯がわざるや。香を装い来れ。座乃ち香を焚いて云く、我若し先師の意を会せずんば、香煙起こる処 脱し去ることを得じと言ひ訖りて便ち座脱す。峰乃ち其の背を撫して云く、坐脱立亡は則ち無きにあらざるも、先師の意は未だ夢にも見ざる在り。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。九峰道虔は石霜慶諸に仕えていました。石霜が亡くなった後、多くの者は堂中の第一座に堂頭位を継いでもらうことを望みましたが、九峰は承知しませんでした。そして言いました。「衲が質問するのを待ちなさい。もし師の法を会得しているならば、師と同じように仕えよう」と。そして質問しました。「師は述べられた。『安らぎの境地に入つて立ち去り、一休みして立ち去り、一つの想いを長い年月抱き続けて立ち去り、働きのない無の心をもつて立ち去り、一本の白い練絹のように立ち去る』と。とりあえず述べてみよ。どんなことを明らかにしているのだろうか」と。首座は言

〔釈意〕

潭州の石霜山の石霜慶諸が亡くなった時のこと、住持に推された首座を、侍者であった九峰が拒み、首座に質問した。この質問で用いられているのは、学人の修行の有り様を述べた「石霜七去」のうちの五つである。本則では「一切の働きを休止し、身心の受動と能動を停止し、時間の長短を無くし、煩惱を無くし、少しの雑念も無い」ということで、これに対する首座の答えは「平等の世界を明らかにしたものだ」と見えたのなら、その理由は「平等の世界を明らかにしたものだ」と見えたのなら、それらにとらわれず、さらにその世界を明確に見極めていかなければならないからである。これに対して首座は香を焚かせて「坐脱」したのだが、これに対する九峰の言葉は、「立ったり座つたりといった身心にとらわれずに悟りを開くことは容易だが、そ

いました。「一切平等の世界を明らかにしている」と。九峰は言いました。「それならば、まだ師の法を悟っているとはいえない」と。首座は言いました。「あなたが衲を認めないなら、香の準備をしてほしい」と。すると首座は香を焚いて言いました。「衲がもし師の法を悟っていないのなら、香の煙が起こっているあいだに、この世を抜け出して立ち去ることはできないはずである」と。そう言い終わると、座ったまま亡くなってしまいました。九峰はその背中を撫でて言いました。「立ったまま、座ったまま死ぬということがないわけではない。しかし、あなたは師の法をまったく会得していないのだ」と。

の悟りにとらわれずにいるということは難しい。これでは師の法を悟ったとはいえない」という意である。

【頌】 頌曰。石霜一宗。親傳九峰。香煙脱去。正脈難通。月巢鶴作千年夢。雪屋人迷一色功。坐斷十方猶點額。密移一步看飛龍。

〔訓読〕 頌に曰く。石霜の一宗。親しく九峰に伝う。香煙に脱し去り、正脈通じ難し。月巢の鶴は千年の夢を作し、雪屋の人は一色の功に迷う。十方を坐断するも猶点額す。密に一步を移さば飛龍を見ん。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。石霜慶諸の悟りは確実に九峰道虔に伝わっています。香の煙の中に抜け出しても、真の仏法はそこありません。月に巢を掛けた鶴は永遠の命を手に入れ、雪に閉じ込められた家の人は自由を失います。すべての幻想を断ち切ったとしても、まだ心にわだかまりがあります。そこから僅かに一足を踏み出せば、竜のように自由を得られます。

【釈意】

石霜の宗旨は九峰にのみ但し伝わっており、香の煙の中に坐脱してしまつた首座は、石霜の教えの中に留まつて、自身の自由を得たとは言ひ難いとしている。月巢の鶴は九峰のことを指し、自由自在の境地を表す。雪屋の人は、雪の降り積もつた家にいる人という意味で、「一色辺の事」にとらわれている首座を指している。雪屋の人が雪に取り囲まれて、身動きが取れない状態になつていのように、首座も「一色辺の事」にとらわれて自身の自由を失つていすることを示している。九峰は僅かに一歩及ばなかつた首座を惜しんでいる。

【語彙】

【九峰】九峰道虔（不詳）のこと。唐末五代の人。青原下。【石霜】石霜慶諸（807〜888）のこと。青原下。普会大師とも。【遷化】禪僧が死ぬこと。【首座】禪宗寺院の役職で、衆僧中の首位に坐る者をいう。【住持】寺の頭となる僧。住職。【先師】遷化した師に対する敬称。【一念万年】万年という長時間も一念に取まるということ。【寒灰枯木】煩惱や妄想がないこと。【一色白練】不純なものがなく純粋であることの例え。【一色辺】差別相対を越えた一切が平等な世界のこと。【坐脱立亡】立ったまま、あるいは坐つたまま死ぬこと。【一宗】一門のこと。【十方坐断】あらゆる束縛を超越した世界に出ること。【点額】出世の関門に登ろうとして失敗すること。

第九十七則 光帝幞頭

【本則】 舉。同光帝謂興化曰。寡人取得中原一寶。只是無人酬價。化云。借陛下寶看。帝以兩手引幞頭脚。化云。君王之寶。誰敢酬價。

【訓読】 挙す。同光帝 興化に謂いて曰く、寡人 中原の二宝を收得す。只だ是れ人の價を酬ゆるなし。化云く、陛下の宝を借りて看ん。帝 両手を以て幞頭脚を引く。化云く、君王の宝、誰か敢て価を酬いん。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。同光の時代を治めた荘宗皇帝が、興化存奨に言いました。「朕は、中原の宝を手に入れました。これには、誰も値を付ける事はできません」と。興化は言いました。「陛下の宝をお借しください」皇帝は、両手で冠の四隅にある垂れを引き、その顔を見せました。興化は言いました。「陛下の宝には、誰も値を付けることができません」と。

【釈意】

莊宗が皇位に就いて世を治めたとき、国の宝とは自身だと示した。世俗において皇帝は唯一無二の地位にある。しかし、皇帝のみならず世の人々も、唯一無二の命を今生きている。個々それぞれに尊く、かけがえない自身を生きているのである。莊宗は政治の立場で自身が唯一無二であると示したが、興化はそれが仏道では唯一無二の仏の命となることを言いたかったのである。移ろいゆく世法の虚しさと、普遍の真理である仏法の真実との立場の違いが示されている。興化の想いは、自身を宝と思う皇帝が、善政を敷いて、世の人々が平穩に暮らせるなら、それも化導の方途となるという点にあったのかもしれない。

【頌】 頌曰。君王底意語知音。天下傾誠葵藿心。掇出中原無價寶。不同趙璧與燕金。中原之寶呈興化。一段光明難定價。帝業堪爲萬世師。金輪景耀四天下。

【訓詁】 頌に曰く、君王の底意知音に語る。天下誠を傾く葵藿の心。掇出す 中原の無価の宝。趙璧と燕金と同じからず。中原の宝 興化に呈す。一段の光明 価を定め難し。帝業万世の師と爲るに堪えたり。金輪の景は四天下を耀かす。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。 莊宗皇帝は、気心のしれた興化に自分の真意を語りました。天下の人々は、その陛下に誠をつくし、葵藿の心を捧げます。皇帝が取り出した価値を付けられない中原の宝は、趙璧や燕金とは比べ物にならない宝です。皇帝は中原の宝を興化に見せましたが、輝かしい光を放つその宝に、値を付ける事は難しいものです。皇帝の治世は、永遠の模範となるのに十分です。その光は四天下に輝きます。

【釈意】

葵藿とは向日葵のことであり、向日葵は、常に明るい太陽の方角へ向くことから、世の人々が仁政を敷く皇帝を慕う様子を表している。皇帝の宝は、皇帝自身とあるが、その想いは万人に共通している。趙璧や燕金など、形ある外の宝とは比べられない、価値を付けるのが難しい物である。それを仏性に置き換えてみれば、悟りは目前にあることに気づくはずである。

【語彙】

【中原】魏または洛陽のことをいう。【同光帝】後唐の莊宗皇帝のことを指し、同光は、莊宗皇帝の治世で用いられた元号（九二三年四月～九二六年四月）。【興化】魏府興化の存奨（830～888）のこと。臨濟義玄の法嗣。【幞頭】中国の被り物の一種。【趙璧】趙の恵王が得た和氏の璧のこと。【燕金】燕の昭王が千金を台に置いて、世の賢士達を招いたこと。

第九十八則 洞山常切

【本則】 擧。僧問洞山。三身中。那身不墮諸數。山云。吾常于此切。

【訓読】 挙す。僧洞山に問う。三身の中。那の身か諸數に墮せざるや。山云く、吾れ常に此において切なり。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が洞山良价に問いました。法身・報身・応身の三身のなかで、どの身がはからいにおちませんか。洞山は云いました。衲はいつもそのものになりきっているのだよ、と。

【釈意】

本則は曹洞宗の祖となる洞山良价の宗風が主題である。仏身を法身・報身・応身の三身に分けて解釈するのは、教学の立場である。僧の問いは『維摩經』卷上の「弟子品」の語を持ち出して、どの身が三科七大などに墮ちない無為の真法身であるのかと問った。洞山は、衲はいつもここにおいて、この身と心の間には無駄な言句を容れる隙がない。無為の仏身そのものになり切っているというのである。

【頌】 頌云。不入世。未循緣。劫壺空處有家傳。白蘋風細秋江暮。古岸舡歸一帶煙。

【訓読】 頌に云く。世に入らず。未だ縁に循わず。劫壺の空処に家伝あり。白蘋風細かなり秋江の暮。古岸船帰る一帶の煙。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいたしました。世俗に紛れず。まだ因果にも流されません。遠い過去にこの世界ができあがる前から真実を伝えていきます。今も変わらず、秋の湖畔の夕暮れには、風がそよそよと白い浮き草を揺るがしています。人気のない岸に船は帰って行き、一面に煙が漂っています。

〔語彙〕

【洞山】洞山良价。（807～869）。曹洞宗の派祖。諡号は悟本大師。俗姓は俞氏。会稽諸暨の人。雲巖曇晟の法嗣。筠州（江西省）の洞山に住す。【三身】法身、報身、応身である。【諸教に墮せざるや】諸教とは、六根六識六境の三科、地水火風空根識の七大等をいう。【切】切とは少しも隙間がないとの意。【劫壺空処】成劫、住劫、壞劫、空劫、これを四劫という。費長房が壺中に入ると、仙書にはそこに別天地があるという。空劫の壺の中という意味で、時間、空間を超越している世界の別天地のことをいう。【白蘋】水辺に生える秋草の名で初秋の頃白い花が咲く。古来秋風を吟ずる時必ず詩句の材料に用いられる草である。

第九十九則 雲門鉢桶

【本則】擧。僧問雲門。如何是塵塵三昧。門云。鉢裏飯桶裏水。

〔訓読〕 挙す。僧雲門に問う。如何か是れ塵塵三昧。門云く。鉢裏の飯桶裏の水。

〔釈意〕

分別妄想の世界に留まることなく、世に処して世に溺れないことをいう。縁に応じてしかも縁に心を奪われぬ。天地未開以前の、分別妄想がまだおこらない以前の世界で、迷悟の区別もまだ出来ない前からの真実である。秋の光景は、諸法実相を示す洞山穩密の家風を述べたのである。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。僧が雲門に質問をしました。「塵塵三昧とはどのようなのですか」と。雲門は「椀にもった飯と桶にいれた水」と応えました。

〔頌〕

頌曰。鉢裏飯桶裏水。開口見膽求知已。擬思便落二三機。對面忽成千萬里。韶陽師較些子。斷金之義兮誰與相同。匪石之心兮獨能如此。

〔訓読〕

頌に曰く。鉢裏の飯桶裏の水。口を開き胆を見て知己を求む。思擬すれば便ち二三機に落つ。對面すれば忽ちに千萬里と成る。韶陽師 些子に較れり。斷金の義 誰か与に相同じからん。匪石の心 独り能く此の如し。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいたしました。雲門の「椀にもった飯と桶にいれた水」とは、一言でいえば、体の中をすべてさらけだして己の存在を理解することです。分別が入ったならば、第二機、第三機に落ちるの、雲門と向き合っても、かけ離れてしまいません。雲門は的を得た答えを出しました。雲門には、

〔釈意〕

僧が雲門に悟りの境地を質問し、雲門が答えている。雲門は、椀と桶とが日々用いられる、そこに本来の在り方があり、仏性そのものであると答えている。特別なところに仏性があると分別しては、目に触れているものが仏性であることに気付かなくなる。雲門はそのことを僧に示したのである。

〔釈意〕

人の本来の在り方そのものが仏性であることを雲門は説いている。このことを理解出来たとしても、そこに疑いを持つたり捉われてしまえば、仏性を掴むことはできない。それは、雲門が示した仏性とかけ離れてしまうからである。たとえば、雲門の答え以外に仏性の存在を求めることは、雲門の答えに分別をもつて見ることである。また、雲門の答えが仏性そのものだとみれば、自ら

金を断つことのできるような鋭い言動があります。他に誰が雲門のような人がいるでしょうか。石のように堅い不動の心を保つ人とは雲門のことです。

明かすことなく、その言葉をただ信じているだけになる。このような二見から離れなくては、真実を会得できないのである。

〔語彙〕

【塵塵三昧】『華嚴經』賢首品。微塵のなかにすべてを摂入せしめる。無礙三昧。【雲門】雲門文偃（864～949）のこと。嘉興（浙江省）の人。俗姓は張氏。雪峰義存に参じてその法を嗣ぐ。同光元年（923）、韶州雲門山に禪宇を建立した。韶陽師。【鉢裏飯桶裏水】碗の中の飯と桶の中の水。そのそれぞれが、そのあるがままの在り方に安らいでいるさま。『碧巖録』五十則本則にも。【些子】少し。ちよっと。【断金之義】鋭利。【匪石之心兮独能如此】『詩經』の擗風・柏舟の語。石は転がすことができるけれども、自分の心は動かすことはできないの意で、心が確固不動なことのたとえ。

第百則 瑯琊山河

【本則】 擧。僧問瑯琊覺和尚。清淨本然。云何忽生山河大地。覺云。清淨本然云何忽生山河大地。

〔訓読〕 擧す。瑯琊の覺和尚に問う。清淨本然、云何が忽ちに山河大地を生ず。覺云く、清淨本然、云何が忽ちに山河大地に生ず。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。瑯琊山に住している瑯琊慧覺和尚に質問をしました。「清淨本然ならば、どのようにして忽ちに山河大地が表れるのでしょうか」

〔釈意〕

僧が瑯琊慧覺に『首楞嚴經』の言葉を引用して、すべての存在が如来蔵を内包し、清淨本然であるならば、どうしてここにまた、山河大地があるのでしょうか、と質問をした。清淨本然も、山河

と。瑯琊は「清浄本然ならば、山河大地が表れる」といいました。

大地も悟りの境地を指す語である。自己の分別を離れなければ真実を会得できない。瑯琊が僧の質問と同じ言葉で、そのまま答えたことは、清浄本然が山河大地そのものであり、不離一体であることを示し、分別を脱する道に僧を導いているのである。

【頌】 頌云。見有不有。翻手覆手。瑯琊山裏人。不落瞿曇後。

【訓読】 頌に云く。有を見て有とせず、手を翻して手を覆う。瑯琊山裏の人、瞿曇の後えに落ちず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。有るものをみては否定する。拳を翻しては覆う。瑯琊は釈迦の後ろに下がることなく、生きた教えで導いている。

【釈意】

悟りが何であるか知っていれば、見誤ることがない。「見有不有。翻手覆手。」とは、本則で僧が、清浄本然と山河大地を別ものとみていることに当てはまる。悟りの真相を識っている瑯琊は、仏の世界をそのまま見ているから、今と別の場所に悟りがあると思うことがないのである。

【語彙】

【瑯琊(山)】 滁州(安徽省)西南一〇里にある。山中に開化寺がある。【覚和尚】 瑯琊慧覚(生没年不詳)のこと。汾陽善昭の法嗣。瑯琊山で臨済の宗風を挙揚した。【清浄本然】 云何忽生山河大地。【『首楞嚴經』卷四の次の箇所を典故とする。】「世尊若復世間一切根塵陰処界等。皆如来藏清浄本然。云何忽生山河大地。諸有為相次第遷流終而復始」(『大正藏』19、119c)【瞿曇】 最上の牛の意で、インドの王族の姓氏の一。釈尊のこと。